

したことを経験して、探している人にはウェブ公開が貴重なものであると信じられるようになった。これからも積極的に書籍の画像を公開して、

ご利用の方々への便宜を図っていく所存である。

(令和4年10月例会)

郡上医学の夢～美濃郡上藩の医師修業 同地方の江戸期医事

森永 正文

郡上八幡は古来より東海北陸地方の交通、軍事上の要衝とされ、狭溢な地に関わらず数多くの大名の転封が繰り返されている。その一つである青山家は郡上宝暦一揆のため御家断絶となった金森家3万8千石の後を受け、1759年、丹後宮津より郡上に入部した。美濃、越前の両国にわたる4万8千石である。戦後の地方史ブームのもと刊行された『郡上八幡町史』史料編(全7巻)には、『青山家家臣由緒書』として青山家の転封に付き従った家臣506家及び中途での断絶100家の、計606家の家系と勤め方が記されている。郡上藩医の経歴についての詳記もある。

1. 美濃郡上藩の医師修業

1781年、城下八幡柳町に儒医家出身の江村北海を館長とする藩校(郡上講堂、号は潜龍館)が開学した。同じ頃、天明年間に江戸講堂が開設されたが、『家臣由緒書』には1795年に定府藩医林元仲が藩医学教育に功労があったとして褒賞を受けたとされる記述があり、これより先、江戸講堂に医学講座の開かれていたことも推察される。また、国元郡上では儒医杉岡道啓、内科・外科臨床医杉岡良作がそれぞれ第2代、3代館長を務め、父子のあいわたる藩校職歴は1820年以來のべ10年近くにも及んでおり、郡上講堂での医学教育の嚆矢となった可能性もある。その後、1838年には国元藩医浅井家九代政時が潜龍館の「重立取引」に就任している。なお、味岡門下四傑の一人、浅井周伯は同家三代にあたる。幕末の1858年ころ郡上郡で赤痢、腸チフスの伝染病が蔓延したことが

ら、藩主青山幸哉公はこれを機に西洋医療に力を入れ藩校に医学の講座を設けるとともに優秀な人材を江戸に派遣している(『郡上郡医師会史』高橋教雄氏)。郡上藩校は江戸校、郡上校の二元化したものであったが、幕府崩壊による定府藩士の帰国を契機に一元化して、1868年6月には文学・武学の科目に新たに医学・洋学を加え藩校名も集成館と改称した。明治3年6月八幡本町に集成館医学科の別館として種痘・施療の臨床を行う医学所が開設された。この医学所はのちに医学寮、医学校と名を変えている。しかし、廃藩置県により明治4年11月集成館は閉校となった。藩医学教育という藩内医師修業のほか、医師の数々の他国医学修業、すなわち藩外での医師修業がみられる。江戸期(幕末まで)の代表的な遊学生として湊宗有(京都伊良子家)、林元仲(池原長仙院(雲伯))、中泉松庵(幕府西洋医学所)の3例があげられる。維新時には4名が藩費遊学生として東京に派遣されている。これら若きエリート達に託された「郡上医学」の夢も明治4年7月の廃藩置県によりついでた。『各藩医学教育の展望』(山崎佐著)の「郡上藩の項」に、【明治二年「藩政定別」を制定しその中「医者には常に学校に出ることと心得べし云々」とて、医師の勉学を命じている。】との記述がある。法令を出してまでも、医師となるものに対して藩では医学修業を勧めていたことがわかる。郡上藩が医師教育、医師修業の重要性を認識していたことを改めて再認識させられる。

2. 同地方の江戸期医事

1) 郡上地方における疱瘡の小史：江戸時代、郡上各地でも疱瘡の大流行が繰り返されたようで「疱瘡見舞帳」（八幡新町斎藤家）など種々の記録が残されている。「大前家文書」（『飛驒の疱瘡史』）からは郡上八幡の町医富岡玄三が1850年8月頃南飛驒地方で種痘を行っていたという史実がうかがえ、郡上地方でもこれ以前に種痘の始まっていたことが推察される。『万留帳』（郡上牧村・粟飯原豊後正著）の1864年の記事には「当秋頃方八幡並近に=疱瘡流行いたし候、然し近来植疱瘡はやり何れも過半ハ植有之候故か、大はやりニもなし」との記述が見られ、また、明治3年6月5日の領民へ種痘・施療事業の開始を知らせる郡上藩民政局御触書にも「尤当管内は是迄も少しハ被行有之言迄も之無く」と記述されており、明治3年4月の「府藩県種痘普及要請令」（太政官布告）を受けて郡上藩では種痘事業のための医学所を開設したが、その開始を待たず、すでに郡上での種痘はある程度普及していたようである。

2) 藩内の医事：郡上藩医は約14名を数え、身分的には士格医師と非士格医師、職制的には奥医師と表医師に大別され、また士格医師と非士格医師の間には同じ藩医であっても給与にはかなりの開きがある。なお、藩医の職務の一つ、軍役として会津救援のため派遣された郡上藩「凌霜隊」の軍

医小野三秋は、明治元年9月19日、若松城西出丸において隊員石井音次郎の右胸部弾丸摘出術を施行している。のちに郡上藩医学校の教官も務めた。

3) 領内の医事：①旅病人と町方医師 八幡八町の町組織には問屋という役があり、これは村送りされて来た旅病人を預かり、その詳細を町名主に報告し更なる次の措置について藩役所からの指示を仰ぐものであり、必要があれば町方医師による治療も加えられた（『名主役中心得書』南町名主斎藤家）。②「医師成願之事」 同『心得書』には城下での医師開業の手続きが記載されている。1828年の「片手配剤禁止令」、1860年の「素人による医療行為禁止令」などの御触書の存在は領内でも多くの不法医業が横行しその弊害が社会問題化していたことを物語っており、それ故に「医師成願」においてもより厳格な医師資格審査が必要とされたものと思われる。③「薬草見分御触書」藩役所より「山野に自生する植物を調査し薬草・薬種となるようなものがあれば、これを採取し製品化すること」が、1830年に郡内の町在医師に触出されている。

以上、郡上地方での自治体誌などの相次ぐ発刊により、以前には知られていなかった同地方での医療史の一端が明らかとなってきた。

（令和4年10月例会）

歴史的観点から理解する医学用語語源

杉田 克生

医学・医療を学ぶ上で医学用語の習得は避けては通れない。医学・医療には長年積み上げられてきた知識の体系があり、習得すべき内容は膨大で多岐にわたる。さらに科学技術の進歩は目ざましく、常に新しい概念に伴う用語が誕生している。学習者は多くの専門用語を学ぶ上で、それらを有機的に結びつけ使える知識とすることが重要であるが、各医学用語には複雑な内容と時代的背景が含まれる。作成された各時代の概念を反映する用

語の理解を深めるためには医学史の素養が必須である。

各語彙には複数の意味が時代とともに付加されてきたが、元となる語源がそれぞれありその変遷を知ることは人間の思考パターンを知る良い手がかりを与えてくれる。例えば医学用語としてメラノコリーとカタカナで表記すると音情報しか分からないが、語源はギリシア語“melancholia”で、「黒」の“melas”+「胆汁」の“cholē”すなわちヒポ